

地域社会への貢献における「講演と映画の会」の役割

Talk and Film Meeting : Its Role as Intellectual Services to the Local Community

大 島 剛

OSHIMA Tuyoshi

1. はじめに

神戸親和女子大学生涯学習センター（以下センターと略す）は、1997年4月に「大学教育の社会への開放を促進し、地域の社会教育・生涯学習に貢献すること」を目的として設置された。もともとこのような活動は、1968年の夏季婦人教養講座の開催にまで遡る長い歴史を持っており、「大学の有する教育・研究の伝統と知的財産を社会に還元し、地域の人々のニーズに応え、地域の皆さんに愛され、地域社会とともに発展して行く大学でありたい」と設置の主旨が述べられている（弓岡、2003）。

この流れとは別に、1988年より大学の有志で開催されていた「講演と映画の会」が、1999年にセンターの予算枠に組み入れられ実態としてセンターの業務として開催されるようになった後、2003年に正式に大学行事として認知された。つまり、センターとは別の発端を持った活動である「講演と映画の会」が、地域社会への貢献という意味で共通するセンターの活動に統合されたことによりセンターの機能がより充実したと考えることができる。以下、本稿ではこの「講演と映画の会」の地域社会への貢献という観点から検討を行い、考察を試みたい。

2. 「講演と映画の会」の沿革

「講演と映画の会」は、本学唐井清六教授が「街の映画館にはあまりかからないような映画を学生ホールで上映するのは如何か、地域の人にも喜んでもらえるし、大学のPRにも役立つのではないか」という感想を、本学の機関紙「親和フォーラム」に寄せたことを発端としている（唐井、1988）。そして1988年10月19日に杉山平一氏（詩人・映画評論家）の講演とソ連映画「戦艦ポチョムキン」が本学学生会館3階講堂にて第1回として開催された。これは当時建設されたばかりの学生会館の多角的利用の1つの試みでもあったが、大学のある神戸市北区には映画館がないため、地域社会への貢献という意味で

画期的なことであったと推測される。以後「講演と映画の会」は、兵庫県映画センターの協力を得て、表1-1、1-2、1-3に示すように年2回のペースで開催され、2004年11月で通算32回となっている。

初期のころは必ずしも講演が行われていたわけではなく、講演の代わりに映画を2本上映していたこともあった。また、「街の映画館にはあまりかからないような映画」ばかりではなく、子どもたちを対象とした「となりのトトロ」など、ポピュラーなアニメーション映画なども上映している。このころの参加者数はほとんど不明であるが、100名以下2桁の小規模な場合も多かったのではないかと推測される。

表1-1 「講演と映画の会」の内容と参加者数（1）

年月日	内 容	参加者数
1988.10.19	第1回 講 演 杉山平一（詩人・映画評論家）：「映画の表現－エイゼンシュテインを中心として」 上映作品 「戦艦ポチョムキン」（エイゼンシュテイン、ソ連、1925）	
1989.4.26	第2回 講 演 中村茂隆（神戸大学教授）：「わたしの映画鑑賞歴－戦中・戦後をつうじて」 上映作品 「大地のうた」（サタジット・レイ、インド、1955）	
1989.10.28	第3回 上映作品 「風の谷のナウシカ」（宮崎駿、日本、1984） 「となりのトトロ」（宮崎駿、日本、1988）	500名
1990.5.23	第4回 講 演 伊藤孝彦（神戸新聞記者）：「いつも映画が先生だった」 上映作品 「無人の野」（ゲエン・ホン・セン、ベトナム、1981）	
1990.10.27	第5回 上映作品 「風が吹くとき」（ジミー・T・ムラカミ、イギリス、1986） 「木を植えた男」（F・バック、カナダ、1987）	
1991.5.29	第6回 講 演 唐井清六（本学教授）：「原作と映画のあいだ」 上映作品 「羅生門」（黒澤明、日本、1950）	
1991.10.19	第7回 上映作品 「魔女の宅急便」（宮崎駿、日本、1989） 「おもひでぽろぽろ」（高畑勲、日本、1991）	
1992.5.27	第8回 講 演 中西恭（アサヒシネマ興行部長）：「映画界の現状」 上映作品 「非情城市」（侯孝賢、台湾、1989）	
1992.10.31	第9回 上映作品 「鳥たちの戦争」（ヤンク・ハンストロップ、デンマーク、1990） 「赤い風船」（アルベール・ラモリス、フランス、1956）	
1993.6.30	第10回 講 演 小森田千栄子（映画評論家）：「女性映画の現在」 上映作品 「薄墨の桜」（羽田禮子、日本、1977） 「痴呆性老人の世界」（羽田禮子、日本、1986）	
1993.11.27	第11回 上映作品 「赤毛のアン」（K・サリヴァン、カナダ、アメリカ、西独、1986）	

※ 参加者数欄の空白は不明を表す。

表1-2 「講演と映画の会」の内容と参加者数(2)

年月日	内 容	参加者数
1994.5.25	第12回 講 演 瀬尾 裕 (本学教授):「弱者へのまなざし-J・スタインベック『二十日鼠と人間』」 上映作品 「二十日鼠と人間」(G・シニーズ、アメリカ、1992)	
1994.12.10	第13回 上映作品 「青い嵐」(ティエン・チュアンチュアン、中国、1984)	
1995.5.27	第14回 上映作品 「家族」(山田洋次、日本、1970)	
1995.12.13	第15回 講 演 南 部 幸 彦 (毎日新聞編集委員):「映画に見るラブロマンスの変遷」 上映作品 「ふたり」(大林宣彦、日本、1991)	
1996.5.18	第16回 講 演 対 談・川 本 三 郎 (評論家)×因 幡 新 平 (評論家) 上映作品 「わが谷は緑なりき」(ジョン・フォード、アメリカ、1941)	
1997.3.15	第17回 講 演 相 米 慎 二 (映画監督):「たかが映画、されど映画」 上映作品 「お引越し」(相米慎二、日本、1993)	
1997.10.11	第18回 上映作品 「地球交響曲」(龍村仁、日本、1992)	
1998.3.14	第19回 講 演 豊 原 幸 枝 子 (作家):「青春デンデケデケデケ小説と映画をめぐって」 上映作品 「青春デンデケデケデケ」(大林宣彦、日本、1992)	
1998.10.31	第20回 講 演 山 田 洋 次 (映画監督):「『学校Ⅲ』を完成して」 上映作品 「学校Ⅲ」(山田洋次、日本、1998) (有料)	600名
1999.6.12	第21回 上映作品 「プラス!」(マーク・ハーマン、イギリス、1996)	250名
1999.11.6	第22回 上映作品 「がんばっていきまっしょい」(磯村一路、日本、1988)	150名
2000.6.10	第23回 講 演 高 畑 勲 (映画監督):「アニメに思うさまざまなこと」 上映作品 「ホーホケキョ とんりの山田くん」(高畑勲、日本、1999)	
2000.11.18	第24回 講 演 佐 野 哲 郎 (本学学長):「妖精の国?アイルランド」 上映作品 「ウェイクアップ!ネッド」(カーク・ジョーンズ、イギリス、1998)	180名

※ 参加者数欄の空白は不明を表す。

また、1998年10月の第20回時には、著名な山田洋次監督の講演が行われる際に有料としている。しかし、本来の主旨にそぐわないなどの理由で有料化はこの回のみになり、その後も現在に至るまで無料で行っている。

そして2000年11月からは大学祭に合わせて開催することにより、大学祭の集客や内容の充実にも寄与していたと考えられる。2003年6月第29回「たそがれ清兵衛」の上映では、非常に人気の高い作品であったため、かなりの人数が入場しこのとき多少の混乱もあった。その反省からこれ以降はこれまでの自由参加方式を改め、整理券方式や、往復はがきによる

表1-3 「講演と映画の会」の内容と参加者数(3)

年月日	内 容	参加者数
2001.6.2	第25回 講 演 朝 比 奈 幸 彦 (指揮者):「映画と音楽」 上映作品 「ニュー・シネマ・パラダイス」(ジョゼッペ・トルナトーレ、イタリア・フランス、1989)	176名
2001.11.17	第26回 講 演 張 新 民 (大阪市立大学専任講師):「チャン・イーモウの映画について」 上映作品 「初恋のきた道」(チャン・イーモウ、アメリカ・中国、2000)	236名
2002.6.1	第27回 講 演 斎 藤 義 典 (映画評論家):「ヘアバーン・チャップリン・寅さん」 上映作品 「ストレート・ストーリー」(デヴィット・リンチ、アメリカ、1999)	261名
2002.11.17	第28回 講 演 淺 野 謙 (映画評論家):「中国映画と第五世代」 上映作品 「山の郵便配達」(霍建起、中国、1999)	400名
2003.6.7	第29回 講 演 岡 本 健 一 (兵庫県映画センター代表):「私の見た山田洋次監督」 上映作品 「たそがれ清兵衛」(山田洋次、日本、2002)	700名
2003.11.16	第30回 講 演 橋 本 明 (俳優):「相米監督のこと、映画のこと」 上映作品 「風花」(相米慎二、日本、2000)	400名
2004.6.12	第31回 講 演 渡 辺 泰 (アニメ研究家):「『キリクと魔女』について」 上映作品 「キリクと魔女」(ミッシェル・オスロ、フランス、1998)	152名
2004.11.14	第32回 講 演 淺 野 謙 (映画評論家):「韓国映画のめざましい充実ぶり」 上映作品 「ラブストーリー」(クァク・ジェヨン、韓国、2003)	285名

予約方式を採用している。ただし、往復はがきであると希望者の制限が可能である反面当日キャンセルの確率も高くなり、徒に空席を増やす結果にもつながっているためまだまだ改善の余地を残すと考えられる。

今までの沿革を概観すると、参加者数は講演の演者や映画の内容によってかなりの幅で増減していることがわかる。しかし、映画の知名度による影響は大きいと思われるが、整理券方式や負荷の高い往復はがきによる予約方式に切り替えても、参加者の大幅な減少は認められず、16年間コンスタントに開催し続けたことによって、着実に地域社会の中で根付いてきたのではないかと考えられる。有料化を避ける方向性を貫く以上、今後もより多くの地域の人々が気軽に参加できる方法を模索していく必要がある。現センターの体制では限界があるものの、学生スタッフ、地域ボランティアの育成・協力によって協働を模索していく段階に入りつつあるようにも感じられる。

3. 「講演と映画の会」アンケート結果の分析

「講演と映画の会」の参加者の動向をより詳細に探るため、第32回においてアンケート調査を行った。今回は、「講演と映画の会」が地域社会とどのようなつながりがあるか、センターが行っている公開講座（以下講座と略す）とどのような関係があるかという観点から、主な調査結果を分析し考察を試みる。

・方法

第32回「講演と映画の会」参加者に対して、映画上演終了後アンケート調査を行った。アンケート記入者には粗品を贈呈し、アンケートの協力を求めた。参加者の属性、それぞれ講演と映画についての感想・意見、センターの講座に関する内容を選択肢および自由記述によって結果を得た。参加者285名中、アンケート回答者は136名、回答率47.7%であった。

・結果および考察

表2-1は、参加者がどのようなメディアを使ってこの会のことを知ったかという点を示している。センターが発行する「講座案内チラシ」が1番多く、その他新聞を加えると半数弱を占めている。年に2回新聞の折り込み広告として配布するチラシの影響の大きさが感じられる。ただし、たった1枚のチラシにしては影響が大きすぎる印象もあり、その背景には毎年コンスタントに発行されるチラシに関してなじみや関心の高さがあるのではないかと推測される。また2番目には「知人から」が3割近く占めている。これはいわゆる口コミというものと考えられ、地域社会のネットワークの存在を表すものである。

表2-1 どのようにして知ったか

メディア	人数	%
講座案内チラシ	43	31.6%
広報こうべ	15	11.0%
ポスター	1	0.7%
新聞	18	13.2%
雑誌・情報誌	8	5.9%
インターネット	0	0.0%
知人から	37	27.2%
その他	7	5.1%
複数回答	2	1.5%

表2-2、表2-3は、参加者の年齢の度数分布および性別を示している。年齢では40代が最多であり、以下50代、60代、30代と続いている。また8割以上が女性であった。

表2-2 年代別参加者数

年代	人数	%
20以下	3	2.2%
20～29	4	2.9%
30～39	18	13.2%
40～49	34	25.0%
50～55	16	11.8%
56～60	13	9.6%
61～65	13	9.6%
66～70	10	7.4%
71～75	7	5.1%
76～80	4	2.9%
80以上	2	1.5%
記述なし	12	8.8%
計	136	100.0%

表2-3 男女別参加者数

性別	人数	%
男性	19	14.0%
女性	111	81.6%
記述なし	6	4.4%
計	136	100.0%

表2-4に示されているように職業は半数以上が主婦であるという結果が示されており、育児の負担が軽くなり、余裕が出てきた主婦層の参加が多かったと推測される。ただし、今回の上映は「ラブストーリー」という韓国映画であり、昨今の韓流ブームおよびその内容からも中高年女性に人気の高いものであるためにこのような結果になったとも考えられ、今後別の映画との比較検討が望まれる。しかし、センターの講座参加者の講座間の比較検討を行った弓岡（2000）の結果で示された「臨床心理学」の講座に参加した139名の属性の特色と今回の結果が酷似しており、ブームや映画の内容を越えたところで、このような中高年主婦層の普遍的なニーズの存在の可能性も感じられる。

表2-4 職業別参加者数

職業	人数	%
会社員	19	14.0%
公務員	7	5.1%
教員	3	2.2%
自営業	2	1.5%
主婦	77	56.6%
学生	6	4.4%
その他	13	9.6%
記述なし	9	6.6%
計	136	100.0%

表2-5は、今回の参加者の居住地域を示している。大阪、京都などの遠方も存在するが、66.2%が

神戸市北区在住であり、全体の約4割が大学周辺の鈴蘭台地区となっている。この結果は「講演と映画の会」の開催の目的に合致しており、明らかに地域貢献をしていることが分かる。

表2-5 地域別参加者数

地域	人数	%
鈴蘭台	54	39.7%
その他の北区内	36	26.5%
神戸市西区	9	6.6%
神戸市中央区	1	0.7%
神戸市灘区	4	2.9%
神戸市垂水区	4	2.9%
神戸市長田区	3	2.2%
神戸市東灘区	3	2.2%
神戸市須磨区	1	0.7%
神戸市(区不明)	2	1.5%
三田市	9	6.6%
加古川市	2	1.5%
大阪府	1	0.7%
京都府	1	0.7%
その他	1	0.7%
記述なし	5	3.7%
計	136	100.0%

また表2-6は、会の今までの参加回数を示したものである。初参加(0回)が46.3%であるのに対し、リピーター(1回以上)は50.8%になって半数を超えており、この比率は先述の弓岡(2000)が示したリピーター率37.9%を優に上回っている。地域別に参加者の属性を比較検討したところ、地元鈴蘭台地区において属性では他の地域との違いは見られなかったが、リピーター率のみ66.7%と突出して高い結果を示している。自由記述の感想にも「この2、3年来させていただき、楽しみにしていた」「毎年楽しみにしている」「昨年参加して良かった」など、リピーターからの良好な反応が得られているように、参加者の半数以上が、特に地元では2/3がリピーターとして参加しており、この「講演と映画の会」が本来の目的に向けて着実に実績をあげていることが分かる。

表2-6 「講演と映画の会」参加回数

回数	人数	%
0回	63	46.3%
1~3回	53	39.0%
4~6回	10	7.4%
10回以上	3	2.2%
複数回	3	2.2%
記述なし	4	2.9%
計	136	100.0%

表2-7、表2-8、表2-9は、センターの講座との関係を示したものである。全体の2/3はその存在を知っていたが、受講経験は2割に満たなかった。表2-9から分かるように、特にリピーターは講座の知名度は高くなっている。この点から講座を知っていても参加しない(できない)層が多く存在することが分かる。講座を受講するまでにモチベーションが至らないのか、有料無料の問題なのか、講座が提供するものと映画が提供するものの質の違いなのか今後の調査、分析が必要である。いずれにしても「講演と映画の会」はセンターの講座参加者とは異なった対象に対して貢献していると考えられ、センターの講座が寄与している地域社会への貢献を補完するものとして、この会の存在意義が認められる。

表2-7 本学公開講座周知度

項目	人数	%
知っていた	90	66.2%
知らなかった	43	31.6%
記述なし	3	2.2%
計	136	100.0%

表2-8 本学公開講座受講経験

項目	人数	%
ある	24	17.6%
ない	105	77.2%
記述なし	7	5.1%
計	136	100.0%

表2-9 「講演と映画の会」と本学講座との関係

項目	人数	%
「講演と映画の会」参加有、本学講座知っていた	58	42.6%
「講演と映画の会」参加有、本学講座知らなかった	11	8.1%
「講演と映画の会」参加無、本学講座知っていた	30	22.1%
「講演と映画の会」参加無、本学講座知らなかった	32	23.5%
記述なし	5	3.7%
計	136	100.0%

4. まとめ

以上「講演と映画の会」についていくつかの視点から検討を試みてきた。現段階では少なくともこの活動が16年もの長い歴史を持ち、大学行事としての公的な位置づけを得て、学内においても安定してきた位置づけを得たこと、独自のリピーターが多いことからセンターの講座だけではカバーできない地元

の層、特に中高年主婦層に多大に貢献していることが明らかになってきた。

今回の調査は回答率がやや低い傾向があるが、むしろアンケートに協力的という意味で意欲的な参加者の状態が反映されやすいと考えられ、今回の結果の解釈にあたっては大きな方向性の間違いはないと思われる。ただし、昨今の韓流ブームの影響が大きいと思われるため別の機会にも同様な調査を行い、比較検討をする必要があると考えられる。

一時は有料とした歴史はあるが、原則として参加費が無料であることは地域社会貢献にもプラスに働き、大学の公的な位置づけを保障するだけでなく、映画館の興行とは一線を画すことになると考えられる。しかし、参加の申し込み方法において事故や混乱を避けるために往復はがきでの予約を採用せざるを得ない状況である。これは一見合理的であるが、当日キャンセルの確率が高まるため座席の充足率が低くなる一方、現段階のセンターの体制では当日のキャンセル待ちの対応は物理的に困難であり、この点では選外になった地域の人たちの希望に沿いにくくなりやすい。これらの対応が今後の課題であると考えられるが、地域との協働という視点で新たな模索が必要な段階に入ってきているとも感じられる。

「講演と映画の会」の必要性は今後も高いと思われる、むしろ地域社会と大学をつなぐ確固たる架け橋になっていく可能性は強いと考えられる。更なる発展への模索を続けていくことが重要であろう。

引用文献

- 唐井清六 1988 映画雑談(上) 親和フォーラム、第7号、6.
- 弓岡静夫 2000 公開講座をめぐる一考察 生涯学習センター紀要、第3号、111-121.
- 弓岡静夫 2003 本学公開講座の現状と課題 生涯学習センター紀要、第6号、109-113.

本稿執筆にあたって、協力していただいた松田誠思教授、情報提供、データ入力・整理などを行っていただいた生涯学習センター山下実事務長、松本修司氏、貝原佐知子氏に感謝いたします。